



▲「まるごとケアの家いわみざわ」のコミュニティスペースに久しぶりに顔を出した利用者家族の前田静子さんを囲んで看護・介護・事務のスタッフが談笑する。明るく穏やかな空気です。

ささえる医療のMindが  
見事にはまって展開していく

# 「まるごとケアの家いわみざわ」

(北海道岩見沢市)

「地域住民」が健康で安心な生活を過ごせるために、医療と介護をベースにした「まちづくり」を進めることで、それを実現しようと奔走する「ささえる医療研究所」(ささえるさん)。今まで多様なサービスを導入して、それがかえって利用者を混乱させてしまうことが悩みでしたが、「まるごとケア」というキーワードが一気に解決してくれました。

「まるごとケアの家いわみざわ」を開設した「ささえるさん」の取り組みには、今後の地方都市での典型的なケアモデルになる大きな可能性が感じられました。その大きな要素となるのが、スタッフたちの家族のようなつながり。「ささえるさん」が取り組む「まるごとケア」取材しました。

## まるごとケアの家いわみざわ

〒068-0844 北海道岩見沢市志文本町4条2丁目1-2

TEL 0126-35-7046(訪問看護ステーションささえるさん)

看護師 5人/介護職員 4人/介護支援専門員 1人

<https://www.facebook.com/marugotosasaeru/> (フェイスブック)



▲ 2017年4月3日にオープンした「まるごとケアの家いわみざわ」。もともとは高齢の夫婦が住んでいた普通の3LDK平屋一戸建て(間取り図は007ページ)



▲利用者家族の前田さんと野田さんご夫婦と話をする「ささえる医療研究所」理事長の村上智彦医師。村上さんは約1年間の白血病との闘病から帰還して約2カ月で、味覚障害等も残っているとのことだが、お話はとても力強い。野田さん夫婦は“看取りの体験”を前田さんに聞くために「まるごとケアの家」を訪れた



▲「ささえるさん」と共に夫を看取った前田さんは「まるごとケアの家」で看取りの体験談を話したり、趣味の手芸をコミュニティスペースで教えたり、と自分のできることで何かを手伝いたいと言い、スタッフたちと「何をしようか」と作戦会議中。スタッフは左から訪問看護ステーション看護師の佐藤尚子さんと花田真志子さん、訪問介護管理者の大原一美さん、そして旭川にある同法人の「訪問看護ステーションむらかみさん」から来ていた看護師の山口敬史さん

## ふくらむ “まちづくり”への期待 「まるごとケアの家」



▲訪問前のカンファレンスもコミュニティスペースでサクッと行われる。左から4月に「ささえるさん」の仲間となった佐藤さん、ステーション所長の石崎栄利子さん、そして看護師の齊藤彩さん



▲玄関を入ったところの上に飾られた「まるごとケアの家」のロゴ。隣には「訪問看護ささえるさん」「訪問介護ささえるさん」の表札も仲よく並んでいる。歩いて1分もかからない位置にある「ささえるクリニック岩見沢」も含めた法人グループの愛称は「ささえるさん」だ



▲4月3日にオープン後、地域に周知するためのチラシは介護職の大原さんの手づくり。建物の名称は「まるごとケアの家いわみざわ」だが、「ささえるさん」という名称を強調したチラシになっている。訪問看護と訪問介護が一緒になった「地域の保健室」は、地元で輝くための第一歩を踏み出した

「まるごとケアの家」の原案ができたとき(本誌013ページ・プロログ参照)、大きな役割を果たしたのが、北海道・岩見沢市で訪問診療を中心に地域を支えている「ささえるクリニック岩見沢」院長の永森克志さんでした。

永森さんはクリニックの母体となる「医療法人社団ささえる医療研究所」\*の代表理事でもあり、同研究所の理事長は財政破綻した北海道夕張市の医療を建て直した後、全国に「ささえる医療」の素晴らしさを講演

などで伝えている著名な医師・村上智彦さんです。

その「ささえるさん」が、4月にクリニックのすぐそばで「まるごとケアの家いわみざわ」を開設すると永森さんからうかがったので、4月12日、オープンしてホヤホヤの「まるごとケアの家」を訪ねました。

### 建物は平屋の普通の一軒家

「まるごとケアの家いわみざわ」(以下：いわみざわ)は岩見沢市志文地区にあります。志文地区は市の

中心部から5～6km離れた住宅地で、「ささえるクリニック岩見沢」は「いわみざわ」と徒歩1分も離れていないところにあります。

志文地区を中心に事前にチラシを配って、4月3日に内覧会を開催し、26人が集まりました。取材したときは、まだそのときのお祝いの花が玄関や、中央のコミュニティスペースに飾られていました。

「いわみざわ」の特徴は、ごく普通の3LDKの平屋の一軒家で、そこに訪問看護ステーションと訪問介護・

\*愛称として「ささえるさん」と呼ばれています。



▲ 夕方、コミュニティスペースで開かれた「内部勉強会」。この日は3月に山口県周南市で「ささえるクリニック岩見沢」院長の永森完志さんと石崎さん、そしてクリニック事務長の博田彩奈さんが講演したときのパワーポイントを映し出し、博田さんがスタッフ一同を前に講演を再現した。初めてパワーポイントを見た村上さんは「これはいいね〜。皆さんが取り組んでいることは最先端のこと。自信を持ってこれからも進んでください」とうれしい感想を述べた



▲ オープンしたため、まだ案内板もできていなかった、ということで近くのホームセンターで買った看板台を設置する法人運営本部長・井上浩太郎さんと大原さん、博田さん。手づくり感満載の「まるごとケアの家」に温かな案内板ができる日も近い



▲ コミュニティスペースの隣は2部屋に分かれているが、襖は取り払われている。写真手前が訪問看護で、奥が訪問介護と居宅介護支援。小さなちゃぶ台で看護と介護の連携がすぐにできてしまう、この距離感が素晴らしい



▲ 大原さん（右）と打ち合わせをする法人介護部門統括部長で介護支援専門員の三上薫さん。1月までは隣の夕張で定期巡回・随時対応型訪問介護看護も担当していたが、法人が夕張でのサービスを終了するに伴い、岩見沢で新たなスタートを切ることになった。「ケアマネジャーは制度にしばられてしまうことが多いので、ここ（まるごとケアの家）では自由に地域が楽しくなることを企画したい」と話す

居宅介護支援事業所が同居していることです。そして、もう1つの部屋にはベッドが設置されています。

車いすを利用している方が住んでいた住居なので、ドアは引き戸などバリアフリーになっています。北海道の築20～30年の家では一般的なストーブに直結した煙突も北国らしさを感じられます。

### 看取りをした家族が体験談を……

「まるごとケアの家」のコンセプトの一部に“制度の枠組みにとらわ

れず、地域で援助を必要とする者に対してケアを提供する”があります。取材した日に、さっそくそれを目の当たりにすることができました。

「いわみざわ」のコミュニティスペースで、「ささえるさん」と共に95歳の実母の看取りをした岩見沢市民の前田静子さんが、看取りの準備で不安な心を抱える野田さんご夫妻に自らの体験を語ったのです。

前田さんは、毎日通院介助を行い、病院では長い待ち時間に耐えましたが、やがてつらさからか、母は口も

きかなくなってしまいました。ある日、通院しようとタクシーを呼んだとき、母の顔を見て、「もういい、病院に行くの、やめよう」と言うと、母がすごくホッとしたこと、すぐに訪問診療を依頼すると、2日後には村上さんが事務も含めてチームでやってきてくれたこと、「何かあったら救急車じゃなくて、ほくに電話してね」と村上さんが言ってくれたことなどを昨日のこのように語ります。

訪問診療で穏やかな日々が続いていましたが、5年たち、母は徐々に



▲「ささえるクリニック岩見沢」の事務職の皆さん。左から博田さん、事務次長の千田亜季紗さん、事務・広報担当の五十嵐紀恵さん、医療事務教育担当・相談員の山崎麗実さん。介護の資格も持ち、医師の訪問診療にも同行する「ささえるさん」自慢の“事務っこ”の気配りと明るさは利用者・家族にも好評だ



▲「ささえるクリニック岩見沢」の建物は、バリアフリーにして自宅が最期をと考えていたが病院で亡くなった高齢夫婦の思いを聞いて、2013年に村上さんが購入した。手前の窓の部分が予約外来の部屋



▲「まるごとケアの家いわみざわ」から徒歩で1分もかからないところにあるクリニックも、普通の一軒家をそのまま使用している。永森さんと佐藤さん・齊藤さんが打ち合わせをしている部屋も豊敷きの和室。打ち合わせの内容は奥の“事務っこ”たちにも聞こえ、さりげなく情報連携ができてしまう



▲クリニックは訪問診療がメインだが、予約外来も行っている。診察室とは思えない明るい部屋で医師が患者・家族の話をじっくり聞き、そのすぐそばで電子カルテに事務職が入力、看護師も記録をとる。この日は「まるごとケアの家」で前田さんの話を聞いた後、野田さん夫婦が永森さんに相談を持ちかけた。野田さんはクリニックのご近所さんだ

弱ってきました。そして、2016年9月に前田さんとその姉が眠っているとき、穏やかに天国に旅立ちました。

前田さんは「母は何度も何度も“ありがとね”と言ってくれた。もし、入院していたら、こんな時間はつくれなかったと思う」と少し涙ぐみながら看取りを振り返り、その話を聞いていた野田さん夫妻も大きくうなずいていました。

### 地域住民自身がケアにかかわれる

前田さんは母を亡くした後、ずっ

と何かがつかえるような気持ちでしたが、ある日、電車の窓から介護施設の建物を見たとき、ふっと、「母の介護をしていた私なら、何か役に立つことがあるかも」と思ったそうです。そして、その思いは「いわみざわ」でさっそく実現しました。

介護した家族がその体験を、ほかの家族に気軽に伝えられるような場所は今まで少なかったのではないのでしょうか。住民自身がケアにかかわることのできる、このような場は、全国各地にできはじめている「暮ら

しの保健室」では可能でしょう。さらに「いわみざわ」では、看護や介護の専門職がいつもすぐそばにいます。制度にしばられない「まるごとケアの家」の可能性は、ますます広がっていきそうな気がします。

### “楽しい場所”をめざして

しかし、「まるごとケアの家」のコンセプトができてから、約半年でオープンとは、あまりに準備万端な気が……。永森さんに聞いてみると「実は、ここを買うことを含めて、経



▶ 「back office」の入り口には表札が置かれていた。訪問看護や訪問介護の表札とも共通するデザインで、レインボーカラーがなにやら“楽しげ”な雰囲気



▶ 「ささえる医療研究所 back office」で打ち合わせをする、左から運営副本部長の村上浩明さん、運営副本部長の井上浩太郎さん、事務局長の山田奈緒美さん、そして「ささえるさん」の労務管理のシステムづくりを支援してきた社会保険労務士の片山展成さん。片山さんは法人理事長の村上智彦さんと高校のときの同級生のよしみで手伝うことになったという

## 地元を活性化する ノウハウを構築 「ささえる医療研究所」



▶ 「ささえるさん」は積極的に発信しており、これまでにamazon kindle版の電子出版物を、発行所名「ものがたりくらぶ出版」として数点刊行している。編集長は永森さんだ。また表紙については、広報担当の五十嵐さんがここに来て、パソコンでデザインするとのこと。『まるごとケアの家と半農半介護』（高橋和人著：036ページ参照）もたった100円で発売中！

▶ 「back office」はクリニックから約1.3km、車で5分のところにある建物。岩見沢のほか、旭川にある「村上内科小児科医院」「訪問看護ステーションむらかみさん」「訪問介護むらかみさん」「居宅介護支援むらかみさん」も含めた法人全体の労務管理を担っている



「営陣として許可は出したけれど、あまりタッチしていないんですよ」とのこと。代わりに答えてくれたのが、「ささえる医療研究所」事務局長の山田奈緒美さんでした。

「もともとは2013年ころに、長屋のような低い建物が並んでいて、その真ん中に集まれるスペースがある“ばあやの家”ができないかな、と考えていたんです。その思いはずーっと持っていて、その後、看護小規模多機能型居宅介護がなかなか、といろいろとモヤモヤしていた

のですが、とりあえず物件を探そうと決めたのが、去年の夏頃でした」

そんな山田さんの思いに賛同し、「ささえるさん」の有志がお金を出し合って、その秋に物件を購入しました。そのときは「なにかイベントができるコミュニティハウスに」とか「とりあえず施設に入っている末期がんのおばあさんを預かって、みんなで1日交代で泊り込もうか」など、いろいろな夢を語り合いました。

そういう中で山田さんが大切にされたのは「あまりきちんと“何かをす

る”というのではなく、ちょっとおでかけで来られるような場所、できればそこで“ささえる”のしていることを知ってもらえて、ああ、こういう人たちにケアをお願いできるのなら、と思ってもらえるような場所。そしてなによりスタッフも含めて“楽しい”場所にしたい！」ということでした。

### 地元の仲間で作るフラットな関係

山田さんらの思いは、今までみなしの訪問看護をしていたクリニック

## 高齢者の 1人暮らしを支える 訪問診療と訪問看護



酒井さんを見守る愛猫のシロ。常に外に出ようとチャンスをうかがっている(ようだった)

▲ クリニックから25km、車で約30分の栗山町御園の利用者・酒井たかのさん。83歳でしっかり者だが、ご主人を「ささえるさん」と共に看取り、その後、訪問診療が週1回、訪問看護が週1～2回入っている。糖尿病があるが、「ささえるさん」の支えで1人暮らしを続けている



▶ 石崎さんが訪問している間、酒井さんはずっとおしゃべりが止まらない。「おなかが痛いとか連絡すると永森先生はすぐに飛んでくるんだあ、救急車より速いよ」とうれしそうだ



▲ 1時間弱の滞在の後、看護師の石崎さんを見送る酒井さん。同じ集落には1人暮らしの高齢者が7人いて、「私なんか若いほうだからね。まだまだ頑張らないと」と笑う

の看護部門がステーション化すること、隣の夕張市で介護サービスを展開していた介護部門を岩見沢に移動することが急遽決まったことで、看護と介護の専門職がすぐそばにいる“安心” いっぱいの「まるごとケアの家いわみざわ」という形で完成しました。

ところで「ささえるさん」の最大の特徴は、看護職・介護職・事務職がフラットな関係で、皆さん、とても仲がよいことです。取材中もまるで「大家族」のように、にぎやかで、

信頼し合っている感じが感じられました。仲のよさの理由は、皆さんが“地元のおばちゃん、おねえちゃん”であるため、まず自分たちの住む地域をよくしたい、という同じ思いを持っていることなのでしょう(050ページ参照)。

### 「まるごとケアの家」の夢は広がる

では、それぞれのスタッフは自分たちの地域にできた「まるごとケアの家」に、どんな期待をしているのでしょうか。なお、「ここ」は「い

わみざわ」のことです。

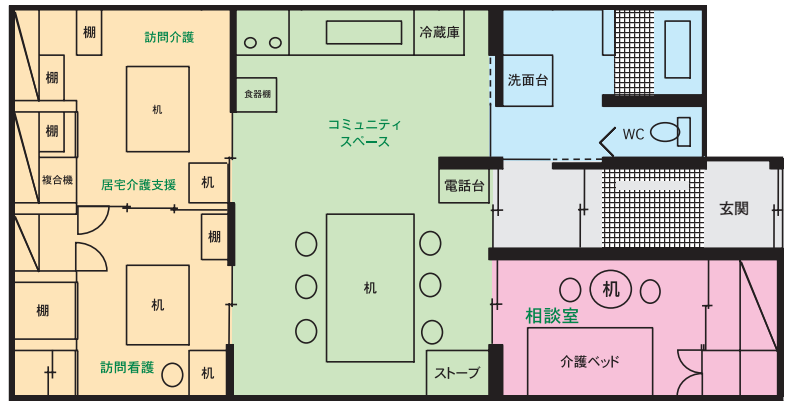
#### 〈看護部門〉

「私には5歳と2歳の小さい子どもがいます。普通、職場にはなかなか連れてこれられないものですが、ここはみんな歓迎してくれるので助かっています」(齊藤彩さん)

「在宅ケアでは事務職と利用者家族の関係性がいいと、親近感が違ってきます。“ささえる”の事務の子たちは訪問診療に同行するし、ここにもいてくれるので家族とよくつながってくれます」(佐藤尚子さん)



▲ クリニックから徒歩5分のJR北海道・室蘭本線志文駅。無人駅で、時刻表を見ると1日の運行本数はわずか7本だが、取材中、ちょうど岩見沢行きのディーゼル列車に遭遇できた。「ときどき鉄道マニアさんが写真を撮りに来ていますよ」と村上浩明さん



▲ 「まるごとケアいわみざわ」の見取り図。玄関を入ってすぐ左の相談室にはベッドが置かれ、ちょっとした休憩にも役立っている



▲ 北海道民自慢の美しいポプラ並木。夏は緑に染まり、冬の雪景色は特に素晴らしいとのこと。訪問する在宅医療や介護では、自然を感じられる景色を見ることで元気になるのだろう



▲ クリニックから車で20分ほどのところにある「石蔵cafe 和徳石庵」。敷地内にRock Hills Gardenがあり、英国調の店内は「岩見沢市民の人気スポット」と井上さん。しかし、取材したときは定休日だった……

「ここにいるとき、私は看護師として接するつもりはないです。近所のおばちゃんの立場で、たまたま一緒にいる人の体調が悪かったら相談に乗るといった感じ。“暮らしの保健室”ですよ。そういう機能を発揮できるので楽しみです。それから看護学校の実習を引き受けて、ここで若手を育てていきたいという思いも持っています」(石崎栄利子さん)

#### 〈介護部門〉

「ここはすごく安心できる場所。小さい子どもが熱を出していても看

護師さんが“いや～、ここ連れてくればいいんだあ”と言ってくれるんです。“ささえる”のスタッフにはほかにも小さい子がいるので、お年寄り子どもが交流する企画も立てていきたい」(大原一美さん)

「私は以前から“暮らしの保健室”のような機能を持つ場が必要だと思っていました。そこは相談だけでなく、利用者さんの具合が悪くなったとき、サッと連れてこられる場所も兼ねていて、まさにここで実現できるんです。イザとなったら、“先

生～」で、すぐに来てくれるから安心でしょ(笑)」(三上薫さん)

#### 〈事務部門〉

「コミュニティスペースで予防につながる体操・ストレッチ・筋力トレーニングなどの教室を開きたい。そして、そこに参加してくれた人が、その友だちに伝えて広がってくれるといいですね」(千田亜季紗さん)

「そうそう、そこにスタッフやその子どもたちも加わり、世代を超えてみんなでワイワイできる空間になってほしい」(五十嵐紀恵さん)

ちなみに千田さんと五十嵐さんは中学校の同級生で、ともに前職はスポーツインストラクターです。

「“まるごと”の家にお茶のみに行こう！」と気軽に来られる交流の場になったらいいですね。今まで元気な人は、急に医療・介護が必要になったとき、誰に何を聞いていいかわからないけれど、ここに来たことがある人になら、すぐ教えてあげられる。そして“訪問してもらうときは、この人たちが来てくれるんだ”と安心感を持ってもらえる。そういうつながりを持てる場にしたいと思っています」(博田彩奈さん)

「今までは訪問診療をしてきましたが、意外と地元でクリニックのことを知らない人がいます。そういう地域の人に“ささえる”のことを知ってもらえる場にできます。以前は飛び込みでクリニックに来た人は、先生がいないときは帰っていただくしかなかったけれど、ここなら誰かしらいますから」(山崎麗美さん)

スタッフの夢は、今、どんどんふくらんでいます。

### 看護師に期待したいコーチング機能

今回の取材のスケジュールを調整してくれたのは「ささえる医療研究所 back office」の井上浩太郎さんと村上浩明さん。back officeにおじゃましたときは、「ささえるさん」をずっと支えてきた社会保険労務士の片山展成さんも来られて打ち合わせが始まりました。ちなみに井上さんの前職場は、片山事務所の隣にある弁護士事務所でした。

打ち合わせの合間の雑談の中で、片山さんが問いかけました。

「井上くんは“ささえる”に入って、つら楽しいんじゃない？ ぼくらは“効率を上げる”世界に生きているけれど、“ささえる”は違うじゃ

## 『最強の地域医療』刊行！

・KKベストセラーズ TEL 03-5976-9121  
・ベスト新書 192ページ/定価 800円+税

2017年4月、村上智彦医師が永森克志医師の協力を得て、最新刊『最強の地域医療』を上梓しました。本書は3部構成となっており、第1章では2015年12月に急性骨髄性白血病と診断され、2度の長期入院に耐え、2017年2月に退院するまでの闘病の様子を“患者”の立場で振り返り、第2章では村上医師のこれまでの地域医療の取り組みを回顧して、病院や地域医療のさまざまな課題を浮き彫りにしています。そして第3章で「ささえる医療」をベースにした“まちづくり”に、これらの課題解決の道があることを示唆しています。

なぜ「まるごとケアの家」が岩見沢でいち早く開設されたのか？ そして今後どうなるのかを含め、地域の医療・看護・介護に携わるすべての人に意識してほしい大切なことが、この1冊に凝縮されています。



ない？」

井上さんは答えました。

「確かに“ささえる”に入って、いろいろところで非効率だなど思うことはありました。でも、その非効率さが逆にスタッフ間の信頼関係を強めることに気づきました。実はここに入る前、“ささえる”のみんなが主体的に動いて輝いていて、うらやましかったんです」

この一言に「ささえるさん」の魅力が詰まっています。

ここで浩明さんに「まるごとケアの家」での看護師の役割を突然聞いてみました。

「看護師さんの言葉にはやはり説得力があります。だから、近所のおばさんでありながらも、“いわみざわ”に来てくれる人にコーチングの能力を発揮してほしいですね」

実は浩明さんは村上智彦さんの息子さんです。父の看護師への熱い思いは息子にもしっかりと引き継がれているようです。

### 「まるごとケアの家」をゆる〜い傘となって見守る医師たち

在宅医療においては、最終的な判断は医師の役割ですが、中心となっ

て動くのはやはり看護師です。さまざまな職種、そして地域の人とフラットな関係性を築きつつも、ケアとケアの両方にかかわれる看護師にかかる期待は大きいものがあります。そのような中、永森さんは医師について「ゆるく傘になり、多職種や地域住民などの邪魔にならない存在」と語ります。

永森さんの「まるごとケアの家」への思いは042ページからたっぷり語られますので、最後は村上智彦さんにまとめていただきます。

「今、日本が抱える大きな問題は“空き家”が増えていること。これは地方だけではない。都市部でも同じです。この空き家を再利用する上で“まるごとケアの家”は素晴らしいツールです。期待したいのは多くの看護師が空き家を買って、そこを多職種や地域住民と連携するためのツールとして活用することです。これから新しいソーシャルキャピタルをつくっていくのは“看護”ですよ。でも、まだまだ看護師はその職能を発揮していない。看護師ができることは医者よりもずっと広いです。頑張してほしいと思います」

撮影/坂元 永 文責/望月 正敏